

氏 名	飯塚 秀樹
学 位 の 種 類	博士(英語学)
学 位 記 番 号	甲第15号
学位授与年月日	2020年3月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当(課程博士)
学位論文題目	English as a Foreign Language(EFL)環境下における 英語コミュニケーションの基盤を養成するための一方略 ～逐次通訳アプローチの実践とその考察から～
論文審査委員	委員 教授 柳 善和 委員 教授 城 哲哉 外部審査委員 深澤 清治 外部審査委員 築道 和明

審査結果の要旨

飯塚秀樹氏の論文は、「English as a Foreign Language(EFL)環境下における英語コミュニケーションの基盤を養成するための一方略―逐次通訳アプローチの実践とその考察から―」と題して、飯塚氏が日本での高等学校及び大学での実践の中で、学習者の英語能力、特に正確に話す能力をどのように向上させるかについての実践を、理論的な背景を精査し、実践の成果を示して実証したものである。飯塚氏は、この実践をタイトルにあるように、「英語コミュニケーションの基盤を養成するため」のものとして提示しており、本論文でその議論を展開している。

本論文は8章から構成されている。第1章から第3章は、本論文の背景、先行研究、指導モデルの構築及び提示にそれぞれ当てられている。第1章「学習指導要領とその実践コンテキスト」では、2020年度から順次実施される、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領によってその実施内容を確認し、併せてこれまでの文部科学省の施策及び指導に当たる教員の状況について紹介している。第2章「先行研究」では、(1) Levelt's Speech Production Model、(2) Kadota's Sound Comprehension Model、(3) Prosody、(4) Formulaic Language、(5) Reproduction、(6) Shadowing の6項目についてそれぞれの先行研究が精査されている。(1)～(4)については、アウトプットに必要となる全体的な処理に関わる研究がまとめられており、(5)(6)については、先行研究に現れた代表的なアウトプット指導法及びその理論的背景がまとめられている。第3章では、先行研究の成果を基にした逐次通訳アプローチが説明され、その理論的背景も含めてその意義が議論されている。指導のステップとして、(1)音声テキスト

の提示、(2)リスニングとシャドウイングによる練習、(3)テキストの分析（学習者の習熟度に応じて、このステップは後に回すこともある）、(4)ノートテイキング（テキスト内容の記号化）、(5)再生練習（テキストの口頭再生練習）、(6)口頭再生によって練習したテキストの書き取り、の6段階が設定されている。

第4章では、まず高等学校(定時制及び商業科)において、実際にこの指導法を適用した実践研究が報告され、それまで英語学習、あるいは学習全般に関心が薄かった生徒たちでも取り組みやすく、一定の成果を得ることができた。これに引き続き、商業科の生徒に対して行った実践研究は、1年生と3年生を協力者として実施され、教科書本文を教材として実施された。学年による違いは見られたものの、いずれも研究期間の後半(学期末)にかけて、統制群の生徒たちよりも高い成果を上げることができたとしている。また、第5章では、大学の医学部医学科及び看護学科の学生を協力者にして実践研究を行った。ここでは、第4章の高等学校生徒の際の教材・指導よりも難易度を上げて実施している。特に教材として使用するテキストを複雑さを示す指標（Flesch Reading Ease, FRE）によって測定し、テキストが複雑になった場合に研究協力者の成績がどのように変化するかなども含めて調査している。その結果、(1)普通教室での指導でもリスニング能力の向上が見られた、(2)協力者による授業アンケート結果から、協力者のモチベーションを維持したまま学習を進めることができた、(3)テキストが複雑になっても、再生率に向上が見られ、発話の流暢性や複雑性の習得を可能にすることができた、といった効果が認められとしている。さらに、第6章では、本研究の成果の一部として、外部検定試験（公益財団法人全国商業高等学校協会による英語検定試験、以下全商英検）の結果を紹介している。協力者として商業科の高等学校で全商英検1級の受験を希望する生徒30名(2年生)に5か月間毎回の授業で指導を行ったところ、このうち20名が合格したと報告している。それまでの合格者は同時期で6～7名であり、この指導法が効果があった可能性が高い。第7章では、教員研修での受講者の反応に関する報告が載せられており、一般の教員の関心が高かったとされている。

論文の評価

第1に、これまで外国語教育（英語教育）の分野では、Communicative Language Teachingでの指導法が主流であり、ひとつひとつのテキストをきちんと再生させるという練習方法よりは、流暢性を重視した練習方法が必要であるとされてきた。飯塚氏の、本論文はその流れを認めつつも、一方で、テキストの音声及び文字言語による再生練習は効果があるとして問題を提起したことに意義がある。

併せて、本論文の「第2章 先行研究」において、関連分野の先行研究を丁寧に検討し、指導法の構築及び学習者に応じた細かな調整を行ってきたことは評価されるべきであろう。

第2に、飯塚氏は、これまで高等学校及び大学で教鞭を執り、その中で本論文でまと

めた指導法をいろいろな形で実践してきた。機会があるごとに、指導法についてデータを取り、指導法を調整し、また、それぞれの研究で協力者となった高等学校の生徒、大学の学生からアンケートを取り、また授業中での形成的評価、定期試験・外部試験での得点を記録し、その分析に当たってきた。協力者は、定時制高等学校の生徒、商業科の高等学校の生徒、大学医学部・看護学部の学生と多岐にわたり、このような幅広い協力者を対象としてデータを示すことができたことは、今後の外国語教育における指導法の研究にとっても、貴重なものであると期待される。また同時に、あらゆる機会を捕らえて、その都度研究課題を設け研究し続けたことも高く評価されるべきであろう。

一方で、今後の課題として、第 1 に、本論文の執筆では、先行研究の調査と指導法の構築及び実践研究が同時並行で進行しており、特に、第 2 章の先行研究の成果と第 3 章の指導法の構築の関連性において、観点がうまく繋がっていない部分も一部に見られる。この点について、今後の研究の進展が期待される。

第 2 に、本論文が実践研究を基にしているとすれば、第 4 章から 6 章にかけて、協力者となった高等学校生徒及び大学学生の背景（学校での英語教育の様子、それまでの英語学習歴など）を、さらに詳しく記述する必要があるだろう。これと同様に、これらの協力者が、この研究後にここで経験した指導法（学習方法）をどのように継続すべきであるのか、その追跡方法なども含めて追加されると、より幅広い記述となると考えられる。

以上の点を総合的に考慮して、審査委員会は飯塚秀樹氏によって書かれた本論文に対して博士号を授与することが適当であると判断した。